

## フィールドで“だらだら”と過ごすものぐさ人類学者の見たタイ北部の 30 年

吉野 晃（東京学芸大学名誉教授）

馬場 雄司（京都文教大学）

### 【全体趣旨】

この発表では、それなりに長期に研究を続けてきた者の研究やフィールドに対する思い、長期に継続してわかったこと、気づいたことなどを語ろうということが目的です。

まず、長くかかわったのは、長期的な展望をもった研究計画に従ったわけでもなく、単に「ものぐさ」だったので、他のフィールドに移るのではなく、惰性でだらだら同じ村で調査したというのが実相です。ただ、「同じ村でだらだら」でも、次から次へと新たな現象が生じてきて、そこから離れられなくなったというのも実情で、しかし、だからこそ分かることも多々ありました。

吉野はミエン（ヤオ）の村で、馬場はタイ・ルーの村で、どこへ向かうかわからない村の行方に身をまかせながら、行き当たりばったりでほぼ 30 年にわたって一つないしは二つのフィールドと関わってきたのですが、それが何だったのかということ振り返ってみたいと思います。

### 発表要旨 ①

#### ミエンの村における定点観測

#### 父系合同家族から核家族へ：タイ北部におけるミエンの世帯構成の変化

吉野 晃

1990 年代に入って急速にミエン村落における核家族化が進行した。これは近代化にともなう一般的な核家族化であろうか。実はそうではなく、40 年くらいのスケールで進行した、核家族化の最終段階であった。これは一つの村でだらだら調査していたのでわかったことである。

発表要旨 ②

地域・歴史・福祉

ナーン県タイ・ルー村落との 30 年—自分史としての長期民族誌

馬場 雄司

1990 年より、ナーン県ターワンパー郡のタイ・ルー村落で 3 年に 1 度行われる守護霊儀礼の変化を軸に、その変化の背景にある社会・文化の変化をみつめてきた中で浮かび上がった問題について考えてみたい。この儀礼の変化は、90 年代からのタイ自体の変化と連動しており、ローカルな視点から現代のタイの動きを見つめることにつながっている。冷戦の終結による国境をまたぐ交流、地方自治、経済危機後の家族・コミュニティへの注目、地方から都市への流れとともに都市から地方への流れなどがそれである。そうした流れを体験し、「地域・歴史・福祉」というテーマのもとにまとめているが、このテーマ自体、そうしたタイ社会の変化と同時に、自分の 90 年代から現在までの関心の重点の置き方の変遷ともかかわっている。それは、歴史学出身で、人類学を学び、福祉系及び医療系の大学に勤務し、のちにまちづくりに関わってきた日本での自分の変遷ともかかわる。

【パークソーイライフの 30 年（番外編）】

吉野、馬場が拠点としてきたチェンマイの「長屋」には、何名かの人々が入れ替わり立ち替わり住処とし、それぞれのフィールドへ出かけていきました。この場所の 30 年の歴史からも見えてくることがあります。